嘉永六年の「青藍集」（秋元安民編）は『衣川』で

菊露　花の香も葉におもりぬる心地してあさ露ふかし園の白菊

くちかたむ　山吹の人たのめなるいろみせてゐてのかはつのねになもらしそ

の二首がある、「短歌」五六六で第一句『花の香の』であり、『山吹の』は「短歌」三五九で、これは「鰒玉」四編にもとられてゐるものである。

「短歌」が『天保十三年冬迄』と題簽にあるのに従へば、広滋はあと一年少々しか生存でない。はつきり云ひ得る広滋の最も終りに近い歌としてあげるには「短歌」の巻末歌をとるべきである。

薄に月のかたふきたるかたかけるしをりに

打まねく尾花か袖をしをりにて同し野末に月のおつらん

花の上に蝶のとひたる

けふたにもうつろふ花に行かふはたれにこてふの便なるらん

やよひはかり友の旅立ける時

もろともに見てたにあかぬ桜花此春斗心してちれ

春興　思ふとち梅をかつらき春山の夕月かけてあそひつる哉

待時鳥　たのもしく梅の若はの露散て山時鳥立またれつる

「短歌」六三八に『元日』、六三九に『立春』、六五三に『伴信友の七十賀に』がある、この辺を天保十三年の作歌とすれば、夏以来の作歌とおもはれるものがない。そのことは広滋自身認めてゐて、題簽に『天保十三年冬迄』と記したのであらうか。しかし、五九三は明らかに『天保十三年冬十月』の詞書があることは前記した。五九三以下を十三年と見てしまへない旨も前記した如くである。

さういふ不審をもつたままで、「短歌」が広滋生涯の作の大半であるといふことは可能である。

鈴門道統において、かかる所伝をなし得ることは、私にあつては珍しい。

二一二 ひむかしの青かく山ははしきかも朝日も春も越てきにけり
二一三 鬼やらふ声かしましき大路をはのとけき春のいかにきつらん
三〇六 東の青かく山をいつこえて高まの山に春はたつらん
三〇七 おきつ風名草の山の梢たにかすみもあへす春は来にけり
五〇〇 難波つにけさたつ春は滝の上の小くらの山やよはにこえけん
五〇一 春たつと人のもる山うへしこそ出る朝日も先にほひぬれ
五三五 かきくもり雪けに暮し大空のなこりかすみて春は来にけり
五三六 けさよりは雪けの雲も立別れことしの空に打かすむらん
五三七 吉野川きしのたるひもとけにけり岩きりとほし春やたつらん
六三九 百千鳥さへつる春の明かたをつくるは声ものとけかりけり

などがある。これを『立春』の題一つでなく『禁中立春』とか『立春何々』とかしても、これらを全部を並べることは、家集の体裁からも出来ないであらう。

広滋の歌が、かうした形で伝へられたことは、広滋の全作に近いとみてよい。その意味で、これは主要なものである。

「鰒玉」に近く出た本居家の「鶯蛙集」（嘉永五）をみると、広滋は『衣川』で

沢若菜　いさけふは月も朧にうつるまて野沢の若なつみくらさまし
鶯　春をしる山のしつくやつたふらむさゝのはかくれうくひす
　　のなく
鶴　あし火たく煙の末もたつむらの羽風になひく難波国原
窓前燈　朝ひこの影にしらみし燈の花の色そふ窓の夕くれ
月前懐旧　あたら夜の月の光にかきくらし昔をのみは思はさらなむ
因幡の国にかへりて学士にめさけられけるとき
　　因幡山千世よはふなる松風に小柴か末も声そへよとか

がある。この『あし火たく』は「短歌」六三五、『朝ひこの』は三六七、『因幡山』は六〇三である。他はみえない。

新しい「近世三百人一首」弾琴緒（明治二一）も『衣川』で

里郭公　柴の戸にこのころきかてこひぬらし山ほと、きす里なれに
　　けり

があるが、「短歌」六七であり、「鰒玉集」三編にもとられてゐる歌である。「近世三百人一首」は近藤芳介の序によつても、すべて琴緒所蔵の短冊の歌であることが示されてゐる。この歌など、広滋は短冊に何度もかいたのかもしれない。そんな場合「鰒玉」にとられてゐることが、心にあつてであつたかもしれない。

広滋は天保十五年（弘化元年）一月十六日三十一歳で歿してゐる。「鰒玉集」三編四編は広滋生前であるが、「鶯蛙集」は歿後である。しかし「鰒玉」でも「鶯蛙」でも、一首二首がとられてゐるのでないから、その資料は広滋自身から出たものと考へてよいであらう。

それに対して、歿後の嘉永元年に出た「玉石集」（鈴木高鞆編）には

湖帰雁　行雁の霞によとむ声すなり志賀の大わたいつこなるらん

が『桐林』であるが、「短歌」四九一は『湖上帰雁』で第三句『声もなし』である。これも、かう広滋自らかいたものがあつたとみてよからう。

にはあらす大君の遠の御門を、さめます君につかふるもの、ふのいつのはく矢そ手にもてる弓矢のみかはおのか身は君かみ楯そわか君は天皇のかしこきやいつのみたてそ梓弓ま弓槻弓柘の弓しなあることく人の子の（十二オ）おこなふわさは橘の蔭ふむ道のやちまたに成てしあれとみかとへにつかふる道のひとすちにはなれてあらめやそか中にたけしいそしといにしへゆとりしむわさのもの、ふの家の子ともは皇国の道なまとひそあめつちの神をこひのみゆつらなす心まなほにつとめもろ〳〵

（サタメ玉ヘル大君ヲイツキマツリテアタマモル）

大君の遠の御門を守ます君かみたてのわれしともしも

神代よりたけきわさをしともしめは弓取なて、心ほこらゆ（十二ウ）

この傍書の推敲は朱書である。

広滋は歌稿の整理にあたつて、短歌と長歌とを別冊にしてゐる。かさねて記すと「短歌」には六百六十四首が整理清書されてゐる。その場合、紙背本紙の二十九首「下稿」の三十首計五十九首がすてられてゐる。

それを示し得るのは、広滋の自筆稿本の「下稿」「短歌」があり、「下稿」が紙背で本紙に歌をもつてゐるからである。これがひとまとめになつて伝へられてゐた。私は和歌山の吉井書店でこれをこの四月入手した。その足で、吹上寺の大平の墓と海善寺の諸平の墓とにたちよつた。

「短歌」には『藤垣内翁まかりたまひける又の年』（五九）、『藤垣内翁の三回忌に』（六八）、『藤垣内翁身まかり給ひて吹上寺に葬ける時』（一一六、一一七、一一八）、『小津美濃子みまかり給ふとき』（三九七）、『藤垣内翁七周忌に』（四六三）、『藤垣内故翁の後室みまかり給へる夢見たりければつとめていはひ言なといひて心さやめてありしにほともなく身まかり給ひしよし師のもとよりいひおこせ給へりしかはいとかなしくてよめる」（五八七）、『藤垣内大平翁の後室天保十二年四月九日みまかり給へるに』（五九一、五九二）、『年ころおやのやうにしたひつるにみまかり給ひぬれはいとかなしくて天保十三年冬十月かの墓に詣て、』（五九三）などの詞書をもつ歌がある。

これで広滋生涯の作歌が伝へられてゐるわけではない。もし生涯の作を整理するとすれば、それを広滋自らの手でしても、歿後他のものによつてなされても、世上の家集の形式をとれば、全作を部立にするのが通例であらう。また、その年その年の中で部立、それを年度順に並べる形式もないではない。それならば、「短歌」は現形で成立してゐるとみることが出来る。作歌年代をはづして全作を部立にする場合は、「短歌」はその資料となる。その場合は、「短歌」より歌数は自然少くなるであらう。例を『立春』の歌でみれば

八二　朝烏のとかに過ぬ大和辺に春立こゆるしるへなるらん

一二二　うす霞大内山に立そめて雲井よりこそ春はきにけり

一二三　春霞棚引そめて宮人のうれしさつゝむ袖そゆたけき

一二九　偽のなき世也けり春たては則かすむ朝日このかけ

二一一　春来ぬとふりさけみれは大空も同じ心に打かすみつゝ

顔なる

阿波国にものしけるときかの国の津田浦といふ浦に船はてして

はてにけりあはれかしこき波の上もわたれは渡す浮宝哉

若山より阿波国へ物しける時かの国のまなひのはらからとも打つとひて歌よみ文かくに冬月といふ題にて（一オ）

吹上の松のあらしやいかならむ月影こほる（寒し）阿波の海つら

千鳥

あま人のあこと、のふる声暮て磯山かくれ千鳥鳴なり

――このあと長歌になるが、これは別記にする。右の『白かしの』が「短歌」五〇五で、第三句は『ふきたゆみ』をとつてゐる。五〇六は『をはしまを』、五〇七は『嶌山にのこる昔の面影は』をとつてゐる。『白波の』『あれにける』はとつてゐない。五〇八は『はてにけり』、五〇九は『吹上の』で第四句『月かけこほる』である。五一〇が『あま人の』である。

かういふ状態でつづき、五八〇まで「下稿」にみえる歌である。

作歌年代は五二八までが天保十年、五七三までが天保十一年、そのあと五九二は天保十二年とわかるが、以下天保十三年との境は判然としてゐない。五九三は十三年であるが、それ以下をすべて十三年と見られない点があり、境は大略六三八あたりと推測は出来る。

「短歌」の六百六十四首中、紙背本紙の二百十一首と「下稿」の七十七首の計二百八十八首は、大略作歌年代が推定可能であることは、如是である。残る三百七十六首を「短歌」の題簽の『天保十三年冬迄』に従へば、紙背本紙と「下稿」の以前と以後とに考へなければならない。

広滋の作歌の推敲過程は、「下稿」の『嶋松』にも示されてゐるが、長歌の場合も同様である。「下稿」一ウの『千鳥』のあとに

寄弓聊述心緒歌一首并短歌（布私袁）

この真弓○我にはあらす勅旨いた、きもちて風のとの遠の御門を守ります君（）につかふるもの、ふのあら木の真弓○此はく矢吾にはあらす大君（）の遠の御門ををさめます君につかふるもの、ふのいつのはく矢○そ手にもてる弓○矢のみかはおのか身は君か御たてそわか君（）は天皇のかしこきやいつの御たてそ梓弓○檀弓○槻弓○柘の弓○しなある如く人の子のおこなふわさは（一ウ）橘の蔭ふむ道（）のやちまたになりてしあれと朝廷へにつかふる道（）の一筋をはなれてあらめやそか中にたけしいそしといにしへゆともしむわさのもの、ふの家の子ともはすめくにの道（）なまとひそ天地の神をこひのみ弓○つらなす心真直につとめもろ〳〵

大王の遠の御門を守ります君か御たてのわれしともしも

神代よりたけきわさをしともしめは弓とりなて、こ、ろほこらゆ（二オ）

があり、上部に、○八〇三□三―三（）三（）三と教へてゐる。

これを広滋は整理して「長歌文章」に入れてゐるが、それをまた推敲してゐる。

詠弓　寄弓聊布私懐

此檀弓（ハ）わかにはあらす勅旨（オホミコト）いた、きもちて風の音の遠のみかとを

まもります君につかふるもの、ふのあら木の真弓このはく矢わか

首計二百八十八首である。

つまり、紙背本紙と「下稿」から、「短歌」に不載の五十九首を拾ふことが出来ることになる。

（以上、混乱をさけるために、重出歌があるが、それにはふれてゐない。）

紙背本紙が「短歌」にとられてゐる状態は次の如くである。（　）内が「短歌」の歌番である。紙背本紙の初め二十首を示す。

一（三五六）、二（三五四）、三（三五五）、四（二二一、詠草原作かれふせる入江の小菅、『初二句又ハかれ尾花むすほゝれたる、結句又ハしもそむすへる』）、五（不載歌、冬枯の本あらの小萩霜さむみ出る日影をふしてまつらむ）、六（一九一、重出二二二）、七（一九二）、八（二一七）、一〇（二一九）、一一（二二〇）、一二（二〇二）、一三（一九五）、一四（一九六）、一五（一九七）、一六（一八九）、一七（一九〇）、一八（二〇三）、一九（一九八）、二〇（二〇〇）

この歌順が前後して通らないのは、批点を乞ふ詠草そのままを重ねてゐるからで、半丁八行八首宛に一応整理された処になると、順序がそれ程に前後してゐない。たとへば

一六三（一〇三）、一六四（不載歌、霞たつ木路の八重山よそに見てさひか野ゝへの若菜つむかな）、一六五（一二二）、一六六（一二三）、一六七（一〇四、重出一二四）、一六八（一二五）、一六九（一二六）、一七〇（一二七）、一七一（一〇五）、一七二（一二八）、一七三（一二九）、一七四（一三〇）、一七五（一三一）、一七六（一三二）、一七七（一三三）、一七八（二三、重出一三四）

これは一応整理されたものとみられる紙背本紙の初めの部分の一丁分である。

これらを別に整理し書きとつたから、その紙背を使用する「下稿」になるわけである。それが稿本「短歌」に当るとみてゐる。つまり「短歌」は再度の整理の結果である。

『国本先師の点ある歌四百首あまり』、『文政十三年の春より天保二年卯のとしまてに二百』、『天保十一年子年迄によみ出たる歌は凡千首不足』といつてゐる、その『千首不足』の中に、この紙背本紙の二百五十八首中の二百四十首の短歌が入ることになる。

作歌順でいへば、この紙背本紙の二百四十首のあとへ、「下稿」の百七首がつづくのである。

「下稿」の歌が「短歌」にみえ出すのは、「短歌」の五〇五以下である。「下稿」初丁を示すと

初雪

白かしの梢のあらしうちよわり（たえ〳〵に、ふきたゆみ、）くるとせしまの夜の初雪

をはしまをかゆきかくゆきうなゐ子の昔にかへる庭の初雪

嶋松

嶌くまによとむ昔の面影はみきりの松のひときなりけり

又嶌山にのこる昔の面影はありその松のひと木なりけり

又嶌くまにのこる昔の面影は岩かき松の一木なりけり

又嶌くまの松の一木をしるへにて思へは遠き昔也けり

白波の千重に八千重にくりかへしおもへは久し嶌の松かえ

あれにける嶋のありそに袖たれて松も昔を忍ひ（カコチ）

編にも

播磨国広峰にて

千町田の穂の上になひく朝霧をしかまにおくるひろの山風

（上五十八オ）

があるが、この方は稿本九ウにあるが『○』の朱書はない。

「鰒玉集」四編の刊行は天保十二年一月であるから、稿本「短歌」の成立を一応これを根拠にみることが出来る。

一の「詠草下稿」は、すべて紙背を使用してゐて、三十四丁仮綴であるが、表紙に『詠草下稿　天保十年十一月阿波国徳嶋ノ於旅宿起筆　広滋』とある。歌のあるのは二十五丁までで、その中にも長歌もあつて短歌ばかりではない。

短歌は総歌数百二十一首中百七首である。この百七首の内訳は天保十年の作三十一首、十一年六十五首、十二年十一首である。

これを整理して「短歌」には七十七首が収められてゐるから、「短歌」不載は三十首である。

「下稿」二十二オウに次の如き文字がある。

此度家に帰りて文棚の塵はらふとてあやしの反古なとをとりそろへみれはおのれいとをさなきよりよみ出たる歌の詠草ありかたはし見もて行に一首たに歌のやうなる物も見えすあなむつかしされと過し事とも思ひ出る便にてなつかしうなんかくて歌數ともかそへみるに十四歳の冬よりよみたる歌国本先師の点ある歌四百首あまり有文政十三年の春より天保二年卯のとしまてに二百よみたり合て六百首也其已後ことし天保十一年子年迄によみ出たる歌は凡千首不足（二十二オ）あり何れも色なき塵芥のやうなる物なれとかそへ見さらむもあたらしうおもひてかそへつ其詠草ともをこたひ障子にはるとて雪ふく嵐のまとをおほひけるもの也

天保十一年子ノ十月廿四日朝（三十二ウ）

この『国本先師』は国本道男である。十四歳は文政十年である。

この「下稿」はすべて紙背を使用しゐるから、紙背の裏、即ち初めの表にある歌は何かの形で整理ずみとみてよいであらう。その整理ずみのものが「短歌」であるといふことになれば、簡単であるが、「短歌」になる前に、もう一つあつたことがわかる。

紙背の本紙には、さうみ得るものがあり、また批点を乞ふための詠草もある。

紙背の「下稿」は本紙と大略逆年代になつてゐる。紙背本紙には『愚草　天保四年冬』（三十三オ）があり、『天保八歳正月ヨリ七月迄詠草点作写　広滋　‖此点柿園点　—此点藤垣内点』（十九オウ）の文字もある。この写以外に、批点のある詠草そのものもあつて、大平・諸平の区別もつくが、『天保八歳正月ヨリ七月迄』は年月に矛盾がある。大平は天保四年歿であるから、これは諸平のみになら矛盾しないが、解決出来かねるものがある。

それらの問題を含んだままで紙背本紙の歌を数へると二百五十八首あり、短歌はそのうち二百四十首である。

これを「短歌」とてらすと、二百十一首が「短歌」に所収で、不載は二十九首である。

「短歌」六百六十四首中、紙背本紙の二百十一首「下稿」七十七

○三なけきあまり露の柴ふに来て見れは昨日は去年と秋風そふく（三ウ）

熊野にものしけるとき

○四わたつみの豊幡雲そなひくなるありまの村に神祭るらし（三ウ）

里時鳥○三しはのとに此ころきかて恋ぬらし山時鳥里なれにけり（三ウ）

早蕨　○三初蕨猶春しらぬ姿哉もえてもすゑのむすほゝれつゝ（四ウ）

若山にありける比竈山の陵にまうてゝ

○三わかのうらの波路の夕日せにおひて御陵とふさへかしこかりけり（五ウ）

吉備の小嶋にて

○四うち渡す二名の嶋や吉備の海に慈波たてぬ守ならまし（七ウ）

木曽義仲○四小くるまもうしと見つらん故郷のきそのかけはしふむ心ちして（十一オ）

野遊　○おもひねの夢路をたとるこゝちしてかすむ春野にあそふけふ哉（十一オ）

冬懐旧○四面かけはまさめに見えて雪の上にふりにし人の跡なきやなそ（十一ウ）

春夜話といふことを

○四いさや君また夜はふけし花鳥の色ねの外も品さためせむ（十二オ）

呼子鳥○四山桜きのふかちりしみよしの、奥をふかむる呼子鳥哉（十四オ）

除夜　○四一とせのこよひのわかれいかならんあすを春とし思はさりせは（十五オ）

山中秋興○四今はとてかへる山路にもみち葉のかけふみわくる夕つくよ哉（十八オ）

松経年○四さゝれふむいその崎なる一松岩ほもしらぬ年やへぬらん（十八オ）

夏川　○なつみ河秋つの宮し近けれはまたきに風の清く吹くらん（十八オ）

口かたむ○四山吹の人たのめなる色見せて井手の蛙のねになもらしそ（十八ウ）

三月はかり在田郡にゆく道にて

○四のほりたちかへり見すれは山蔭にしらて過こし花も有けり（二十五ウ）

緑樹連村暗

○四里遠く霞てくれし春のひの面かけこもる夏木立哉（二十五ウ）

『○三』が四首、『○四』十二首、『○』二首である。

広滋の学統から推して、これを「鰒玉集」と関係するものとして、対してみると、『○』の二首以外はすべて、「鰒玉集」の三編四編にある。なほ三編には広滋として

老　おいぬとてなにかなけかん世の人の羨むはかりとし経ぬる身を（下六十一ウ）

もあるが、これは広滋の稿本「短歌」にはみえない一首である。四

桐林広滋

熊谷武至

「国学人物誌」「故学人姓名録」「鶯蛙集」「青藍集」「近世三百人一首」「鳥取藩和歌史」「大辞典」などは、『衣川広滋』である。

本居大平の「門人名簿」同内遠の「門人録」「鰒玉集」「玉石集」「日本人名辞典」などは『桐林広滋』である。

『衣川』は広滋が長秋の後嗣であるからである。

手もとに、広滋の稿本三種がある。

一、「詠草下稿」

二、「短歌」

三、「長歌文章」

――この「詠草下稿」と「短歌」とによつて、広滋の家集成立の過程をさぐるのであるが、これを近世歌人の家集成立の一つの型としてみることも兼ねたい。

二の「短歌」は、半紙本、墨付三十四丁。題簽に『短歌　広滋詠』とし、横に『天保十三年冬迄』とある。半丁十二行、上に題下に歌で一行になつてゐるものが大部分で、総歌数六百六十四首、各年度ごとに部立してゐる。

この一オを示すと

立秋　〇三　さかの山西吹あくる色見えてうき雲はやし秋や立らん

七夕別　天つ空たゝよふ雲や棚機のひれふる今朝のたれとならましいつまてか涙の川にみそきして祈るかひなきよをあかすらん

祈恋　よそに見て昨日は過し恋草に露置そむる此夕かな

初恋　夕日影さすや片野のつほすみれ薄紅も色そあらそふ

菫　なつかしき床と雲雀のおちくらん菫咲野の春の夕暮

閑居燈　なかめやる月も今はの有明に影うすれゆくまとの燈ね覚して涙の露も深きよに燈しめる蓬生の宿

浜　妹か嶋かたみの浦に風立て玉藻寄来る吹上の浜吹上の浜松か枝の葉こしにて同しみとりのおきを見る哉

雲　白雲の淡たつみねや空の海のしきなみよする磯へならまし白雲の棚引かきり大王のあつき恵や空にしるらん

第一首の頭にある『〇三』は朱である。外にも朱で『〇』『〇四』などとあるものがある。それをぬくと、

藤垣内翁身まかりたまひける又の年秋懐旧といふ題にて〃〃〃〃〃